

2017年7月17日

立教大学国際学術研究交流制度
2017年度「招へい研究員」報告書

1. 招へい概要

受入 教員	所属・職	異文化コミュニケーション学部・教授
	氏名	奥野 克巳
受入学部・研究科・研究所		異文化コミュニケーション学部
招へい 研究員	所属・職	Professor, Branch of Humanities, School of Science, National University of Mongolia 協定の有無：学部 所在国：モンゴル
	氏名	Chuluunbaatar Luvsanjav
招へい期間		2017年6月15日～2017年7月13日（29日間）
研究経費		584,190円

2. 滞在中の活動

来日および離日を含め、滞在中の活動を記入してください。全日程（毎日）記載する必要はありません。講演会やセミナーなどを開催した場合はタイトル、会場、参加者数等を記載してください。

活動内容記入例）〇〇について研究討議、共同研究、講演、講義、大学院生への研究指導等

年月日	活動内容
2017年6月15日(木)	来日
2017年6月16日(金)	立教大学滞在中の講演、講義についての打ち合わせ、研究討議
2017年6月19日(月)	第3回宗教人類学研究会にて口頭発表、L. Chuluunbaatar "Studies of Mongol Shamanism."、池袋キャンパス 12号館ミーティングルーム A,B、参加者 15名
2017年6月28日(水)	異文化コミュニケーション学部科目 海外フィールドスタディーA (モンゴル) および日本語教育インターンシップ (モンゴル・トライアル版) 向け講義、池袋キャンパス 5号館 5205、参加者 6名
2017年7月5日(水)	異文化コミュニケーション学部科目 専門演習 II(奥野克巳)向け講義、池袋キャンパス 5号館 2階 5201、参加者 10名
2017年7月8日(土)	立教大学異文化コミュニケーション学部主催公開講演会「シャーマニズムを真剣に受け取る——宗教人類学の課題と展望」にて口頭発表、チロンバートル「モンゴルのシャーマンの霊力について」、池袋キャンパス・14号館 D301、参加者 65名

3. 研究・交流状況および成果

上記に記載した活動について、具体的な研究・交流の内容および成果を、本学の学術研究、教育活動、国際交流の進展へ与える効果を含めて、記載してください。講演会やセミナーなどの参加者層（学生、大学院生、一般、教職員等）、会場の様子なども記載してください。

◆6月19日（月）の第3回宗教人類学研究会にて、チロンバートル氏は、"Studies of Mongol Shamanism."というテーマで口頭発表した（英語）。前半では、1864年のバンザロフによる記念碑的なモンゴル・シャーマニズムに関する研究に続いて、1921年以降の社会主義体制下で迫害されたモンゴルのシャーマニズムを研究した研究者たちが紹介され、1990年の民主化以降のシャーマニズムの復活と研究の隆盛の経緯が辿られた。後半では、今から5000～7000年前のモンゴルにおけるシャーマニズムの誕生から、匈奴時代のシャーマニズムの勃興、モンゴル帝国時代（13世紀）における諸宗教の融和状況におけるシャーマニズム、16世紀のラマ仏教の移入による仏教とシャーマニズムの混淆、1920年代から1990年代にかけての共産主義体制下でのシャーマニズムの抑圧と衰退、1990年以降の復活までが様々なエピソードとともに辿られた。最後に、口琴を演奏し、世界を祝福するパフォーマンスも披露された。シャーマニズムの王国たるモンゴルのシャーマニズムの全容に触れることができた。

その後、シャーマニズムが抑圧されるのはいかなることか、モンゴルのシャーマニズムはどのように分類されるのか、外来宗教である仏教との関係でシャーマニズムが駆逐されず、混淆したとはいかなることだったのか、モンゴルでは女性のシャーマンがなぜ多いのかなどについて質疑応答が行われ、活発な意見・情報交換が行われた。

15名の参加者の内訳は、本学教員（専任、兼任）、大学院生、一般からの参加であった。

◆7月8日（土）立教大学異文化コミュニケーション学部主催公開講演会「シャーマニズムを真剣に受け取る—宗教人類学の課題と展望」では、パネリストの一人として、「モンゴルのシャーマンの霊力について」という題目で発表した。モンゴルのシャーマニズムはこれまで、シャーマンの霊力を真剣に受け取る人々の態度に支えられていたことを意識しながら、そのエネルギーの本質を探る試みがなされるべきであるというのが、発表の骨子である。

他の3つの発表では、身体と沖縄の地図を重ね合わせる第二次大戦後を生きるユタの創造性が論じられ（佐藤壮広「土地の記憶をつなぐ民間巫者：戦後沖縄社会とユタの語り」）、仏教の浸透や国家体制により消失したかのように見える内蒙古のシャーマニズムが、現代の人間だけでなく家畜を対象とする人々の行為の中に見られるという指摘がなされ（都馬バイカル「モンゴルの祖先崇拜：潜在するシャーマニズム」）、伝統的に十字架を用いるマヤの人々の日々の儀礼実践の中に、現世と他界のバウンダリーを超えて、人間存在の本質に接近するマヤ存在論があり、それが私たちに何をもたらしてくれるのかに関する一つの見通しが示された（実松克義「マヤの十字架・マヤ・シャーマニズムにおける生命の樹と人間存在の探究」）。

コメンテータからは、シャーマニズムが社会構造だけでなく、祖先神や最高神につながるありさまへの着目が真剣に受け取ることにつながるのではないかという指摘がなされた。また、フロアーからは、沖縄シャーマニズムの創造の問題、シャーマニズムを真剣に受け取ることとカントの悟性と感性の相関、ヨーロッパのシャーマニズム、仏教とモンゴルのシャーマニズムの関係などについて質疑が寄せられ、シャーマニズム研究の課題が話し合われた。

参加者65名の内訳は、本学および他学の教員、大学院生、本学学生、一般からの参加であった。